祝「名古屋節句飾」伝統的工芸品に指定される

愛知県や岐阜県で製造されている「名古屋節句飾」が、1月15日㈮に経済産業省から伝統的工芸品として指定された。

指定を受けて、中部人形節句品工業協同組合の組合長である山田泰男理事長は「アピールが難しい分野ではあるが、これを機に宣伝にも力を入れていき、さらに高いレベルの製品を作りたい」と抱負を語った。

申請にあたり尽力した㈱好洋の清村好英社長は「職人との結び付きが非常に強い地域。個々が独立し、製造者が販売も行ってきた。プラスチック素材を用いた頭やサイズの呼称など、独特の技法やこの地域から生まれたものがある。そうした文化や技法を地域のブランド力として上げていきたいという狙いがあった」と申請の背景を話し、次のように期待を込める。「伝統的工芸品として指定されることで職人のモチベーションを上げ、継続して働き続けてほしい」。

清村社長は指定を受け、「ここまで準備するのに10年以上かかった。さまざまな方面の方にご協力いただき、成し遂げることができた。『やっと』という思いが強い。皆様のご協力に感謝したい」と話し、「名古屋節句飾は、郷土玩具からからくり人形まで多彩な技術と表現力がある。それが地域の光る手技」と胸を張る。

今後の発展にも期待したい。

名古屋節句飾の沿革と歴史

名古屋節句飾は「衣裳着人形」「幟旗類」「雪洞」の三点からなる。主な製品は次の通り

人　形……ひな人形や五月人形、浮世人形、市松人形

幟旗類……鯉のぼり、武者絵幟、鍾馗旗

雪　洞……雪洞、燭台

名古屋は尾張徳川家の城下町として、江戸前期より各種の工芸技術が発達していた。衣裳着人形と幟旗類は、江戸後期に『尾張年中行事絵抄』に記されるほど発展した。雪洞に関しては、江戸時代より提灯製造が盛んで、節句用の雪洞もその一つとして作られていた歴史がある。

名古屋節句飾の製造工程

衣裳着人形／頭づくり・胴づくり→衣裳づくり→着せ付け→振り付け→仕上げ→完成

幟旗類／枠掛け→筒引き→染め・天日干し→水洗い→裁断・縫製・口輪付け→完成

雪洞／火屋づくり→骨づくり→組み立て→塗り→内貼り→絵付け→金具装着→完成

名古屋節句飾の特徴

●衣裳着人形

①製品の幅が広い。名古屋地域は郷土玩具が盛んなところで土人形から、からくり人形まで幅広く存在する。

②人形店の組織は他の地域と異なる。職人（生産者）と御店（おたな＝問屋）の分業制ではなく、事業部制のような店単位で製造から販売まで手掛ける。

③江戸、明治期は生産が盛んで、宮の渡しから地元の物産品として他地域に販売されてきた。販路拡大の恩恵を受けたので、水運の神様が祀られている大阪の住吉神社の修繕時には明治、昭和の時代にそれぞれ寄進した。

④名古屋節句品の雛は派手で売りやすくできている。

⑤名古屋の人形店は製造から販売まで手掛けているので資本の蓄積があり、いち早く先端の技術を取り入れる機運がある。陶頭も瀬戸の業者と協力して、他の地域より優れた複製技術により、陶の上に直接上塗り胡粉で仕上げることを可能にした。この優れた複製技術は戦後プラ頭、石膏頭の開発に貢献。一時、業界過半数の生産力を持った。

⑥各地域の人形の形状の特徴は、京人形は上品、江戸雛は粋、岩槻人形は江戸に親しみを加えた庶民的、駿河は量産可能な普及品。京都は大阪を中心に関西圏、江戸、岩槻は関東圏という巨大な商圏がある。名古屋雛は派手で豪華が特徴で中部圏を含め圏外に販売を広げた。

大きさを表す呼称も旧来の「七番」「八番」「6寸」「7寸」から「7S」「8S」「613」「713」のように名古屋の人形店の寸法が業界で

一般的となった。

⑦からくり人形師が手掛けた市松や雛、武者人形も名古屋節句飾。木彫の頭、胴に仕立て上がりの装束を付けた逸品。

⑧風俗人形や武者人形などは脚を足裏まで針金を貫通させて串刺し状に脚を作り胴に装着する。足の裏まで針金が貫通してない場合は台付けするとき、足裏に竹釘か鉄釘付けなければならない。戦後、人形を台に取り付けて出荷するようになった際、名古屋式の胴は台に刺した針金を台裏で曲げることで早く、強固に台付けできる。大きな人形やたおやかな女性の表現が可能になった。名古屋は桐塑と藁胴の組み合わせで表現の幅を広げ、型崩れの少ない製品を効率よく提供できるようになった。

⑨胴に手の針金を付ける際、針金の中央に小さなV字を作り胴に装着する。五月人形の重い小道具を付けても形状が変らない。雛の場合も多くの襲を着せて腕折りするときも、針金が胴にしっかりと接着しているので正確に作業できる。高額品の条件となる左右平均の取れた美しい形ができる。

●幟旗

江戸時代に軒先に菖蒲を差し、庭先に幟を立てて、季節の変わり目の邪気祓いをしたことが起こり。やがて屋外飾りと室内飾りは別々に発展し、室内飾りには豪華な幟枠が作られ、鍾馗旗や武者幟旗が飾られるようになった。

外幟は勇壮な大漁旗の技法が取り入れられ、竹による枠掛け、糊置き、ボカシなどの技法が発達し、室内飾りとは異なる発展を遂げた。

この地方の染色は名古屋友禅の発祥地である名古屋市西区を起源とし、外幟に使用される木綿は三河地方が日本最古の生産地である。

「衣裳着人形」

名古屋地域における幟旗は中村幟幕店が天正年間から始まり、幟幕から武者幟、鯉幟へ発展し、筒描き、暈し染めによる黄腹の鯉となり、今日に至っている。

なお、「愛知玩具人形組合百年のあゆみ」には、明治末期に尾張地方の特産品である鯉のぼりが明治天皇に献上された記録が残っている。鯉のぼりとしては大正5年に三河の資料館に、明治末期に安城市歴史博物館にワタナベ鯉のぼり製の鍾馗旗が所蔵されている。

●雪洞

この地方は木曽檜、松、美濃和紙、小原和紙など木工紙製品の素材が豊富で古くから提灯の生産が各地で行われてきた。節句飾には、「家が代々続きますように」との願いを込め、明かりが象徴的に使われるようになっている。現在はお雛様には雪洞、五月人形には陣屋提灯と区別されるが、陣屋提灯は提灯の中でも火袋（ひぶくろ）物と言われ、桟の無い折りたためる提灯である。雪洞のような提灯は火屋（ほや）物と言われ、桟があるため折りたためないものである。

絵付けもお盆提灯以外の火袋物は貼ったあとに行う場合が多い。一方、手描き以外の火屋物は予め絵柄の付いた紙（布）を裁断して内側から貼ることが多い。

「幟旗類」

「雪洞」